

【人文科学部門 共同研究】

東南アジアに残る樹皮紙古文書類の 保全と活用を促進するデータベースを立ち上げる

ピーター・マシウス
坂本 勇

代表研究者 国立民族学博物館超域フィールド科学研究部 教授

ジャカルタ特別州立テキスタイル博物館ゲスト・シニア・エキスパート

本研究助成では、この20年間で国際的にもリードしてきた日本人研究者による樹皮紙 Beaten bark Paper 調査研究成果のうち、緊急に保全、アーカイブズ化しておく必要性のあるものにつき調査、整備し、今後の国際的な樹皮紙研究の基盤とすることを意図した。

中心となる項目は「新石器時代に始まった樹皮紙／樹皮布技術を“生きた化石”のように継承する中部スラウェシ地域の、調査ビデオ（2008年インドネシア科学院 LIPI 研究者らにより収録）」「ヒンズー／イスラム期の樹皮紙古文書〈ダルアン Daluang〉の国立図書館登録128点の制作技法調査画像」「インドネシアにおいて、樹皮紙の最も高度な制作技法をとどめる樹皮紙絵巻ワヤンベベルの記録ビデオ（2006年パチタン Pacitan で収録）」である。

本助成研究では、クロアチアの文化人類学徒 Tea Skrinajacic と Marina Pretkovic の2人も加わったが、彼女たちが関わっていたライデン大学の KITLV では、植民地時代の膨大な収集画像と映像を再点検し、新たな視点でアーカイブズを構築している。これまで、あまり知られることの無かった日本の調査研究成果をこのような海外の調査結果ともつなげていくための基盤となるだろう。

【人文科学部門 個人研究】

モンゴル語訳の『菩提道次第広論』の基礎的研究

ARILDII BURMAA (ア ril ディー・ボルマー) 大谷大学文学研究科国際文化専攻 博士後期課程

本研究では、モンゴルにおけるチベット仏教思想の受容の仕方を解明するための基礎資料として、チベット仏教最大宗派ゲルク派の開祖ツォンカパの主著『菩提道次第大論』のモンゴル語訳の調査と、そのモンゴル語訳テキストのコンピュータ入力および検索サイトの構築を行った。

同書モンゴル語訳について、筆者の調査では5種類が確認されている。また、それぞれの訳者を特定し、翻訳年代も推定することができた。そして、同書を含むツォンカパのモンゴル語訳全集について、文献学的な基礎研究を行うことによって、モンゴルにおけるチベット仏教の受容形態の一端を明らかにした。

テキスト入力に関しては、『菩提道次第大論』後半の止観の二章のモンゴル語訳テキストの入力を終え、すでに入力してあった前半と共に、一文毎にチベット語原文と対照させ、モンゴル語、チベット語の双方から検索できるサイトを構築した。

また、『菩提道次第大論』のモンゴル語訳が、チベット語大蔵経をモンゴル語に翻訳するための統一訳語の基準を示した『正字法・賢者の源』の規則に従っているか否かを検討するため、同書のチベット語原文とモンゴル語訳も、コンピュータに入力し、検索できるサイトを構築した。

チベット語文献「仏教史書」(chos 'byung) に関する研究

井内 真帆 神戸市外国語大学 客員研究員
青海民族大学宗喀巴研究院 客座研究員

本研究は、チベット語文献の一大ジャンル「仏教史書」(チベット語でチュンジュン)に関する研究である。チュンジュンとは、「法(ダルマ)の源」の意味であり、基本的な文献の構成はチベット仏教の源であるインド仏教の解説から始まり、インドからのチベットへの仏教伝播の前期(ガタル)と後期(チタル)に分けて仏教史を述べるものである。本研究ではこの仏教史書文献について特に二つの項目について研究を進めた。一つは仏教史書というジャンルの概要を明らかにするため、同ジャンルに対する先行研究を整理し、さらに現存する仏教史書の内容、年代、構成、著者の背景(出身地や宗派)などから分類して同ジャンルの全体像を明らかにすることを試みた。もう一つは、仏教史書文献の中から、仏教史書の構成のスタンダードを作ったといえる代表的な著作である14世紀の大学者プトン(1290-1364)著の『プトン仏教史』を選び、同文献の内容や構成を他の仏教史書と比較し、さらに日本語訳を進めた。現在のところ全4章あるうちの第3章(チベット仏教史)の一部の翻訳を終えた。今後はさらに翻訳を進め、第4章(翻訳仏典目録)を除く日本語の全訳を完成させ発表したい。

カンボジア山地民クルンのオノマトペと環境感受の民族誌的研究

井上 航 国立民族学博物館 外来研究員

東南アジア大陸部の山地民でありカンボジアの少数民族であるクルンは、焼畑稲作等の伝統的生業に今も深く依存する人々である。本研究は、その生活環境の身体的な知覚・感受のありようを理解することを目指し、クルン語のオノマトペ（擬音語・擬態語。クルン語では「真似する言葉」の意味でプルマン・ショーイと呼ばれる）によって身の回りの「動き・形」がどのように感じられ表現されるかを現地で調査した。クルン語については文法などの記述的研究がほとんどなく、オノマトペについても先行研究がないなかで本研究が初めて着手するものである。会話、物語、歌などの収集した話例のなかから語例を拾い上げる、また、現地で撮りためた映像のクリップを話者に見てもらい連想する語例を挙げてもらうなどの形で、オノマトペの語例を収集した。得られた約200語のオノマトペについて、クルン語特有の分節音レベルの音象徴を見出すこと、そして、動き・形がどのように認知されてそれぞれのオノマトペが発語されたかを探ることに取り組んだ。調査結果については2019年3月の東南アジア学会関西支部例会、6月の日本カンボジア研究会定例研究会で口頭発表を行った。また、現時点での研究成果を投稿論文にまとめる作業を目下進めている。

法界仏像にみられる世界図に関する研究 —西域北道・中国内地の作例を中心に—

易 丹韻 早稲田大学文学研究科 博士課程

本課題は、体軀や大衣に須弥山や六道衆生など仏教的世界を構成する様々なモチーフが表現されており、法界仏像と呼ばれる、特異な如来像を研究対象とし、とくに西域北道・中国内地で制作された法界仏像を取りあげ、それらの世界図がどのような世界を表現しようとしたのかという問題について考察を進めている。

研究期間内においては、従来議論の中心に置かれることのない敦煌莫高窟第332窟における初唐の法界仏像、そしてアメリカのボストン美術館とサンフランシスコ・アジア美術館における盛唐末以降の制作とされる法界仏像について熟覧調査を実施することができた。

上記の法界仏像の世界図を考察することによって、それらはいずれも『維摩詰所説経』に由来するモチーフを須弥山の麓の左右に対置させている配置を有するもので、同じ図像の系譜に属することが判明した。そして、莫高窟第332窟の法界仏像が『維摩詰所説経』の記述に直接依拠して同経に説かれる場面を図像化したことではなく、同時期に流通していた維摩経変の図像内容を取捨選択して自らの世界図に盛り込んだことも明らかになった。さらに、初唐の維摩経変の現存作例と比較することによって、莫高窟第332窟の法界仏像の世界図が表現しようとしたのは、維摩詰に救済されるべき衆生の在る娑婆世界であったという結論が導き出される。

中華民国期上海租界における国籍と領事庇護権の研究 ——会審公廨を中心に

郭 まいか 京都大学大学院文学研究科 博士後期課程
(現 京都大学人文科学研究所 連携研究員)

上海共同租界は、19世紀半ば以降、外国の治外法権の傘下で東アジア最大の貿易都市へと発展した外国人居留地である。租界の中で発生した中国人と外国人の間の紛争は、外国領事館員が会審官を務める会審公廨（中華民国北京政府期には外国領事団の管轄下にある）という租界内裁判所がその対処にあたった。本研究は、公廨が扱った案件のうち、外国籍を有する中国系外国人関連の案件に着目し、治外法権制度のもと、外国租界はどの程度積極的にこういった「外国人」に法的保護を与えたかという問題の解明を目指した。史料読解の結果、公廨は北京政府の制定した法を積極的に援用し、租界内の中国系外国人を「外国人」ではなく「中国人」と見なし取り締まっていたことが明らかになった。さらに、イギリス本国の外務省は、植民地で生まれた中国系イギリス人には、制度的・理論的にイギリス人と同等の権利があると認める一方、彼らが中国にいる場合、その身分を完全に保証・保護することは現実的に難しいと考えていた。そのため、これら中国系イギリス人は結局のところ、自己責任で中国渡航せざるを得なかったという英植民地政策の限界も明らかになった。

ヒマラヤオオミツバチをめぐる人類学的考察 ——ネパールグルン族の採蜜活動の変容に着目して

合原 織部 京都大学人間・環境学研究科 博士後期課程

本研究は、植物相の受粉を担うミツバチを生態系を維持するアクターとして捉え、近年のミツバチの生息数が減少している状況が、地域の採蜜文化や、農作物の生産、また植物相などの地域の生態系全体に及ぼす影響を明らかにすることを目的としている。近年のミツバチの生息数の減少は、世界的にみられる現象であり、本研究ではネパールと日本の山村を事例に比較研究を行う。

ネパールの事例では、グルン族によって一生涯として営まれてきたヒマラヤオオミツバチの蜜の採集活動が、近年、民族観光化されたことによる影響を明らかにすることを目指す。グルン族は、野生であるヒマラヤオオミツバチが崖に作る巣から蜜を採集する活動を長年にわたって継承しており、蜂蜜を食や薬として生活に取り込んできた。しかし、それが民族観光化され、主に海外からの観光客がグルン族の採蜜を経験できるツアーが導入されたことで、巣を採集し過ぎることが原因となりその生息数が減少している状況が確認できる。本研究では、ミツバチの生息数の減少が、地域の採蜜文化に及ぼす影響のみではなく、それが地域の植物相や農作物の生産に及ぼす影響を明らかにすることで、グルン族の居住域における今日の生態系の変容の実態を明らかにする。

また、宮崎県椎葉村の事例では、当地域における近年の過疎と獣害の深刻化に着眼し、それによりニホンミツバチの生息数が減少している状況の実態を明らかにする。獣害の深刻化によりイノシシとシカの生息数が増加し、とくにシカが山林の植物を過度に食することが原因となり、ミツバチの生息環境を壊していることが明らかとなった。それが、当地域の生業である採蜜や農作物の生産に及ぼす影響や、山林の植物相の受粉に及ぼす影響を明らかにし、当地域をめぐる自然環境の変容のあり方を明らかにすることを目指す。これらのネパールと日本の事例を比較検討することにより、より多角的にミツバチと人間との関係性や、今日の自然環境の変容をめぐる問題を考察する。

現代カンボジアの言論空間： 民主カンブチア体制成立までの知識人の活動に焦点を当てて

新谷 春乃 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 博士課程

本研究は、1975年の民主カンブチア体制成立までのカンボジア人知識人の活動に焦点を当て、現代カンボジアにおける言論空間の生成と変容を明らかにすることを目的とする。現代カンボジア人知識人の言論活動は、植民地時代のナショナリズム萌芽期の研究蓄積はあるものの、独立以降は為政者による言論統制が厳格化したことを受けて、言論空間の研究は為政者に焦点を絞ったものが中心であった。近年、これら知識人の言論活動を為政者の対抗言説として検討する必要性が指摘されており、知識人の活動の視座からカンボジアの言論空間を捉えようと試みられている。

本研究の方法は国内外での資料収集と収集資料の言説分析である。調査では、1975年までにカンボジア国内で発行された新聞、雑誌等の定期刊行物、官報、同時期に情報省が発行した報告書 *Agence Kampuchea Press* (AKP) を中心に収集した。それら資料を言説分析し、独立後カンボジアの言論空間における指導的知識人の存在、1960年代後半の政府による言論空間の統制、1970年代前半の言論空間の変容について考察した。今後は、収集資料の分析を継続するとともに、考察対象の時期を前後により広く設定し、近現代カンボジアの言論空間における知識人の活動を包括的に研究したい。

帝国日本と近代東アジアの銅像 —台湾・朝鮮・満州の例と歴史遺産としての現況比較

鈴木 恵可 東京大学総合文化研究科 博士課程
(現 中央研究院台湾史研究所 訪問学員)

本研究は、19世紀末から20世紀前半にかけて日本の支配下に置かれた東アジア地域、とくに台湾・朝鮮・満州（中国東北部）に設置された銅像を対象とし、その設置過程とそれらが果たした社会的役割、また現在そうした歴史遺産が各地域でどのように消失または保存されているかについて明らかにするものである。調査のなかで、各地域とも日本の統治が始まった早い時期から日本人総督等の銅像が数多く建設されており、その多くが日本内地の彫刻家の手によるものであることが明らかになった。また、1930年代以降には日本で近代彫刻を学んだ台湾人・朝鮮人の若手彫刻家たちも銅像制作の一部を担った。だが、銅像の内容には各地域で相違があり、台湾においては台湾人像が公共空間にはほとんど設置されなかった一方、朝鮮においては朝鮮人像が数多く建設されている。戦争末期の金属回収令によってこれら地域の銅像も多くが回収されたが、台湾では今日戦前期の銅像が一部再発見され、再展示されている。他方、朝鮮・満州の銅像はほぼ現存していないが、朝鮮人像に関しては韓国内で戦後に一部再建された。東アジア各地域に現れた戦前の銅像は、その初期から日本と関係性が密接であり、今日に至るまでその歴史問題は継続していると言える。

古代インドにおけるアディヤートマ哲学の再建に向けて

高橋 健二 京都大学大学院 博士後期課程
(現 日本学術振興会海外特別研究員
ナポリ東洋大学 アジア・アフリカ・地中海研究科)

本研究の目的は、先行研究では認知されていなかった古代インドのアディヤートマ哲学を解明することである。本研究では、古代インド叙事詩『マハーバーラタ』(BC 2C頃～AD4C頃)におけるアディヤートマという語の用法を分析し、少なくとも4つの教説においてこの語が自説を指す名称として用いられており、これらの教説群が自説をアディヤートマ哲学と認識していたことを明らかにした。

さらにアディヤートマ哲学およびそれと関係の深い教説の具体的な内容として、『ヴァールシュネーヤ・アディヤートマ説』ではマナス(「心」とマノーヴァハー(「心を運ぶ」)脈管を中心に、体内の脈管による循環体系と知覚や性欲などといった心理現象とを結び付けようとしていること、また『ブリグとバラドヴァージャの対話』では、自我を火としてとらえ人間の死後における自我の存続を元素論によって説明しようとしていることをそれぞれ明らかにした。以上の研究成果は、学会発表4報、一般講演1報、論考2報(*Journal of Indian Philosophy* 47 (3), 421-452, 2019及び*Journal of Indian and Buddhist Studies* 67 (3), 1055-1058, 2019)として発表した。

遊牧帝国の残照

—新疆ホボクサイル・モンゴル自治県の オイラド・モンゴルの歴史記憶に着目して—

查斯 查干 総合研究大学院大学文化科学研究科 博士課程

本事業では新疆ウイグル自治区ホボクサイル・モンゴル自治県を中心に現地調査を行ない、ウルムチと北京において文献収集をした。ホボクサイルに居住するオイラド・モンゴルの殆どは、1630年前後にヴォルガへ移住し、1771年に帰還した人々である。

報告者は帰還集団内部において聞き取りと参与観察を行ない、帰還に関する歴史語りを入手した。それらの帰還の歴史語りは様々な内容とジャンルにわかれており、帰還の原因、帰還途中での出来事、帰還した直後の出来事を英雄物語、民謡、早口言葉、祝福詞などのかたちで語っている。そこでは帰還集団とホボクサイルという土地との関係が緊密であることを主張するのである。

それがマスメディア、博物館などにおけるトルグド帰還の表象が主張する「祖国への帰還」と異なっている。ではトルグド集団内部に伝承される歴史語りが何を意味しているのか、それを収集したデータをもとに分析していきたい。

清末中華民国期のオルドス（イフジョー盟）における キリスト教宣教師たちの布教活動と現地に与えた影響

ハス 高娃 神戸大学大学院国際文化学研究所 博士後期課程3年生

本研究では清代内モンゴル・オルドスのモンゴル文公文書史料を利用し、現地で唯一土地を獲得して教民村を作っていたカトリック教会である聖母聖心会に注目して、史料不足等の原因で研究が不足していたキリスト教問題を検討した。

1860年から清朝におけるキリスト教の信仰・布教が再び許可され、康熙年間に没収された教堂・教徒財産の返還が要求された。オルドスでは教堂が建てられたこともなく、仏清北京条約の第6条款による教会に対する返還問題が存在しなかった。更に清朝政府の政策や寧夏地方から始まった回民反乱の影響もあって、キリスト教に関する通知も中国本土より20年間も遅れていた。清朝政府が光緒4（1878）年から宣教師を保護する命令を下し、地方官員がキリスト教と関わる案件を審理せよと光緒8（1882）年に命じたことを明らかにした。当時、聖母聖心会は教民村を作り教徒を寄せ集めて布教する方法を定めていた。旗に属するモンゴル人を教会に集住させようとし、それが旗民の賦役や身分隷属関係に関わったため、モンゴル人官員との間で人を奪い合うトラブルが起こっていた。宣教師たちは土地や耕作権を獲得した後に小作料や水の使用料を巡ってトラブルを引き起こしていた。これが義和団事件以前のオルドスにおける教案の明らかな特徴であることを明らかにした。

西夏がモンゴル帝国以降の中央ユーラシア地域における チベット仏教信仰に与えた影響の解明

浜中 沙椰 早稲田大学大学院教育学研究所 博士後期課程

本研究は西夏王国（1038-1227）のチベット仏教信仰が、モンゴル帝国の興隆以降、中央ユーラシア地域に拡大したチベット仏教信仰に与えた影響を、「白傘蓋経」の相承系譜に着目し解明することを目的とする。鎮護国家の仏教経典である「白傘蓋経」は、西夏時代および、西夏崩壊後の旧西夏領においても刊行され、元代にはチベット僧バクバが、フビライの王権演出に使用した経典である。

本研究では、西夏文とチベット文白傘蓋経、および白傘蓋経の相承系譜に関するチベット文伝記史料を用い、西夏時代・西夏崩壊後・元代という各時代に刊行・活用された白傘蓋経を調査した。ロシア科学アカデミー東洋文献研究所に所蔵される四点の木版西夏文白傘蓋経の閲覧調査を行い、西夏時代に普及した白傘蓋仏母の特徴が三面八臂であり、その尊容と持物の特徴はba ri rin chen grags（1040-1112）がチベットに伝承した白傘蓋経（西藏大藏経北京版、No.2929）の本尊の尊容とのみ一致することを確認した。さらに元代にバクバが記した「白傘蓋の成就法」は、本尊の特徴が三面六臂であるものの、ba ri rin chen gragsから相承したテキストである。よって、西夏時代と元代に普及した白傘蓋経のテキストは共通する人物に由来することが確認できた。本研究は西夏時代とモンゴル時代のチベット仏教信仰を一貫してとらえるための手がかりとなると考えられる。

17世紀ハルハ＝モンゴルの王位継承と内陸アジア世界

前野 利衣 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 博士課程大学院生
(現 日本学術振興会特別研究員SPD)

内陸アジア東部における17-18世紀とは、現代モンゴル国の人的ルーツであるハルハというモンゴル系遊牧民の清朝への服属をきっかけに、オイラトやチベット等隣接諸集団の勢力図が激変する時代である。本研究は、このような時代のハルハにおけるハーン位の継承原則・過程を明らかにすることを通して、同時代の内陸アジア東部の秩序像を分析するものである。その際に積極的に利用するのは、近年刊行された文書史料集『清内閣蒙古堂檔』(全22巻)に採録される、ハルハ諸侯から康熙帝へのモンゴル語書簡の副本である。ハーン位の継承に関する書簡の読解を通して、この時代のハーン位の理想的な継承者は先代の長子であるが、継承権は歴代ハーンの直系子孫にまで認められ、その中でも年長の者が優位であったことが判明した。また、ダライラマ5世が特定の候補者を後押しするなど、モンゴルに対するダライラマ5世の政治的影響力も実証的に明らかになった。

13-14世紀ヒッラのシーア派学者集団と対スンナ派関係： イマームの美德の書編纂活動の研究

水上 遼 東京大学大学院人文社会系研究科アジア史専門分野 大学院生(博士課程)

本研究では、従来シーア派特有の信仰とされがちであった十二イマームへの崇敬が、13-14世紀西アジアではスンナ派学者たちの間でも流行していた事実に着目し、イマーム崇敬を行うスンナ派学者と、イラクの都市ヒッラのシーア派学者たちがいかに知的交流を行っていたかを分析した。本研究がその一例として扱ったのは、スンナ派学者サドルッディーン・ハンムーイー(1246-1322)が西アジア各地で集めたイマームに関する伝承をまとめた『二つ紐の首飾りの真珠 *Farā'id al-Simtayn*』という文献である。この文献を用いて前述の問題を解明するため、著者の同時代に書かれたとされる写本画像の入手や、関連する史資料の収集のために、イランとトルコで調査を行った。

調査の結果、著者と同時代につくられたイランのマルアシー図書館蔵写本は、『二つ紐の首飾りの真珠』の刊本で用いられたテヘラン大学蔵写本と同系統のものであることがわかった。これらの写本にはいずれも、ヒッラのシーア派学者たちからハンムーイーが学んだ伝承が含まれている。それらの伝承の中に、それまでスンナ派の間で学ばれていたものも含まれていたことから、ヒッラのシーア派学者たちはイマーム崇敬を、宗派を越えた信仰として示そうとしていたと言える。

日本占領下の上海文壇再考

山口 早苗 東京大学大学院総合文化研究科 博士課程

本研究は、日本の占領地政権であった汪精衛政権に参加したために、これまで「対日協力者」「漢奸」として否定的評価を受けた中国文化人に焦点を当て、彼らの文学活動・思想の再検討を通じて、占領地上海の文壇状況を捉え直すものである。中でも本研究で取り上げたのは、汪政権の機関紙『中華日報』の文芸欄である「華風」「中華副刊」の二つで、同文芸欄に集った知識人を研究の対象とした。具体的には同文芸欄の掲載記事目録を作成することで、掲載内容の傾向や作者の政治的・文学的背景から彼らの言論空間を把握することを目指した。こうした考察により、彼らの文学活動が単に時局に迎合した文学表現には収まらない、複雑な心理状況と屈折した民族意識を反映していたことを明らかにした。

18～19世紀におけるベトナム北部山地の社会変容と在地首長の生存戦略

吉川 和希 大阪大学文学研究科 博士後期課程
(現 日本学術振興会特別研究員PD)

18世紀は動乱の発生や中国内陸地域からの大量の移民の流入など、北部ベトナムの山地社会にとって重大な画期であった。しかしながら、北部山地の中でもベトナム西北地域については如上の時代状況にともなう社会変容、およびその状況下での在地首長の生存戦略が解明されつつあるが、東北地域の社会変容や在地首長の動向はこれまでほとんど解明されてこなかった。そこで本研究では東北地域のなかでも諒山地域に注目し、筆者がハノイの文書館や現地 で収集した行政文書の写しや首長関連の漢文家譜などを用いて、18世紀における首長集団の動向、彼らと王朝権力との関係を分析した。その結果、18世紀の諒山地域では、ベトナム王朝権力の統治体制が在地首長を組み込む形で成立し、それは在地首長にとっても権益があったこと、18世紀半ばの諒山地域は動乱に巻き込まれ首長も小さくない被害を受けていたこと、そのような状況下で首長集団は王朝権力との関係構築を通して権益保持を企図したこと、などを明らかにした。このように18世紀のベトナム東北地域では、移民の流入や動乱の多発を原因として社会が流動化する中で、在地首長の側から自身の権益の保持のために王朝権力の地方支配に協力していく集団が現れたのである。

陳元賛『老子経通考』に見える林希逸『老子虞齋口義』批判

李 麗 名古屋大学大学院人文学研究科 博士後期課程
(現 名古屋大学大学院人文学研究科 博士候補研究員)

本研究は江戸初期来日した明人陳元賛(1587～1671)が著し、日本で刊行された『老子』の注釈書『老子経通考』について考察するものである。特に陳元賛が当時の日本で流行した南宋の道学者である林希逸の『老子虞齋口義』を批判した箇所に着目し、林希逸のどの点について批判をしているかを考察することによって、陳元賛の老子観の解明を試みた。

研究期間内で陳元賛に関する資料収集のため、黄檗山萬福寺、天理図書館、元政庵瑞光寺、上海図書館などへ資料調査をしたほか、『老子経通考』に見える林希逸批判の一部の精査を行った。その主な成果は以下の通りである。「道」の理解について、陳元賛は林希逸を含む儒家の学者の誤謬は「道は本より仁、不仁に関わらず」の言の本旨を理解しない所為によるものであるということを明らかにした。特に『老子』第五章「天地不仁」「聖人不仁」の解釈をめぐる考察の過程で、陳元賛は、河上公注に基づいて、「不仁」とは「仁恩を以てせず、自然に任すなり」と解釈しており、「天地は不仁なり」、「聖人は仁なり」と主張する道学の祖である程子の説を反駁し、儒家による「仁」理解の欠点は行動の規範と形而上の道理を峻別していない点であると指摘した。道家は「天心聖心一致」において人間の行動は天地自然の道に法るべきで、「帝力 何ぞ我にあらんや」(『十八史略』卷一)というのが老子の「仁政」のあり方であるという陳元賛の説を明らかにした。また、この程子の説は林羅山の道春点首書『老子虞齋口義』にも引用されることから、陳元賛は、程子の説を反駁することで、暗にその考えに同意している林羅山の老子観を批判しようとしている可能性を見出せた。

陳元賛『老子経通考』に見える林希逸批判は全部で32章にのぼるのだが、今回考察できたのはその一部のみであった。今後もこの課題を引き続き考察していきたい。

※所属、役職は申請時、()内は2019年7月報告書提出時